

会議録

会議の名称	西東京市教育計画策定懇談会（第4回）
開催日時	平成25年1月28日（月曜日） 午後2時から午後4時まで
開催場所	住吉会館ルピナス 研修室
出席者	出席委員：羽豆座長、須永副座長、藤田委員、佐々木委員、高野委員、西嶋委員、渡辺委員、鈴木委員、橋本委員 欠席委員：堀内委員、松村委員、大島委員、近藤委員 事務局：池澤教育部長、櫻井教育部特命担当部長、坂本教育企画課長、清水教育指導課長、西谷教育支援課長、磯崎社会教育課長、相原公民館長、奈良図書館長、宮坂教育部主幹、早川教育企画課長補佐、倉本企画調整係長 傍聴人：1人
議題	1 会議録の確認 2 平成24年度西東京市教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価（平成23年度分）報告書について 3 市民意識調査について（報告） 4 ヒアリング調査について（中間報告） 5 その他
会議資料の名称	資料1 西東京市教育計画策定懇談会第3回議事録（案） 資料2 平成24年度 西東京市教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価（平成23年度分）報告書 資料3 西東京市教育計画（計画期間：平成21年度～平成25年度）施策事業一覧（抜粋） 資料4 西東京市教育計画策定のためのアンケート調査報告書（案） 資料5 西東京市教育計画策定のためのヒアリング調査（NPO法人 西東京市多文化共生センター 子ども日本語教室（NIMIC）） 資料6 ヒアリング調査の実施状況について
記録方法	<input type="checkbox"/> 全文記録 発言者の発言内容ごとの要点記録 <input type="checkbox"/> 会議内容の要点記録
会議内容	
開会	事務局より、欠席者、資料の確認
1 会議録の確認	第3回西東京市教育計画策定懇談会の議事録について、修正等の確認

(修正なしで承認された。)

2 平成24年度西東京市教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価（平成23年度分）報告書について

事務局より資料2、3説明

3 市民意識調査について（報告）

事務局より資料4説明

小学生・中学生調査

○羽豆座長：

まずは「1 学校の楽しさ、学校で楽しいところ」から「3 学校や先生に望むこと」までの結果について、意見や感想を伺いたい。

○佐々木委員：

「2 学校で困っていること」で「特にない」という意見が多かったので、良かったと思う。

○羽豆座長：

小学4年生は「特にない」が41.5パーセント、6年生は45.2パーセント。逆に言えば、約半分は困っていることがあるという解釈もできる。

○佐々木委員：

特に中学生になると悩みが増えてきている。そのような年頃だとは思いますが、「授業がわからない」というのが一番問題だと感じる。

○西嶋委員：

中学校でも、全体の指導ではなく、習熟度別や少人数にしてわかりやすく工夫している。実際にこのような数字が出ているので、更に研究していかなければならないと感じた。

○高野委員：

「3 学校や先生に望むこと」では、「悪いことをしたときは、きちんと注意してほしい」の割合が、小学4年生では27.5パーセント、6年生では24.9パーセントとなっている。4人に1人はそのように思っているというのが予想外だった。もっと子どものことをきちんと見ていく必要がある。また、「全国の中で自分の学力がどれくらいなのか教えてほしい」という意見もあるが、学校ではまったく話題にもしない。あえて話題にせず、「君たちは君たちだ」と言っているが、気にしているのだと思った。

もうひとつ、「いじめのない楽しい生活を送れる学校作りをしてほしい」とあるが、いじめをしているのは子どもたち自身。「いじめのない楽しい生活を送れるように、先生によく見ていてほしい」ということであれば、学校や先生に望むことになる。質問の

仕方が良くなかったかもしれない。数値の読み方が難しい。

○藤田委員：

「全国の中で自分の学力がどれくらいなのか教えてほしい」の割合が高く、驚いた。数値ということ言えば、スポーツテストを全体でやるようになったが、西東京市は東京都の水準よりも低く、子どもが通っている小学校は市の中でも更に低い。今力を入れているところではあるが、子どもたちに「頑張りなさい」と言っても、頑張れる子と自信をなくしてしまう子がいる。数値の扱いは難しいと思う。

○羽豆座長：

小学4年生も全国テストをやっているのか。

○高野委員：

スポーツテストは全学年でやっている。学力テストは5年生と6年生だが、学校によっては学校長の判断で民間のものを取り入れているところもある。

○橋本委員：

「2 学校で困っていること」の「授業中さわがしい、集中できない」は、自分ではどうにもできないことなので、先生や周りの大人にどうにかしてほしいという心の叫びが聞こえてくるようだ。「教室やトイレなど、学校の施設がきたない・古い」に関しては、「自分たちが使っているところだから、掃除をして自分たちできれいにしよう」という働きかけが大人からもされていないし、子ども自身もそう思う機会が少ないので、他人事のようになっているのかもしれないと感じた。

○羽豆座長：

先程のいじめに関する意見と同様、自分たちで良くしていこうという意識が高まってくると変わってくるかもしれない。子どもたちの主体的な活動を促すことが、これからの大きな課題のひとつになりそうだ。

○渡辺委員：

トイレに関しては、自分たちできれいにしようという気持ちとは別に、学校のトイレの状況が今の日本の標準から遥かに遅れていることを把握して進める必要がある。

○羽豆座長：

トイレのことについては、東京都内でも区や市によって随分状況が違うようだ。そのあたりも押さえておく必要がある。

続いて、「4 通っている塾や習い事」から「9 相談相手の有無、相談できる相手」についてはどうだろうか。

○鈴木委員：

「4 通っている塾や習い事」について、前回の調査と比べ、どの学年でも学習塾に通っている人が増えているということに驚いた。自由回答の中にも、「勉強がわからなくて困っている」という意見が見られるので、塾に通って何とかしようとしている人が

増えているのだろうか。放課後の学習塾は、勉強のためだけでなく、安全対策のためや、友だちを見つけるために行くところでもあるという意見が前回の懇談会で出た。何もしないでボーっとしているよりは、どこかに出かけていた方が安心だということがあるのかもしれない。

○須永副座長：

「8 家族と話す内容」を見ると、子どもは結構親と話をしているようだ。話の内容も、学校であったことや友だちのこと、テレビや新聞で取り上げられていること、進路や将来のこと、地震などの災害に関する事まで、満遍なく上がっているので安心した。親が意図的に子どもに話を向けていく努力も必要だと思う。

○橋本委員：

「5 友だちと外出するところ」では、小学生は「公園」が断トツだ。昔は公園に行くといったら身体を使って遊ぶというイメージだったが、今は公園にゲームを持って行って座り込んでいる、という使い方だ。公園に行っているからいいとするのではなく、身体を使っているわけではないことを認識しておく必要がある。

○藤田委員：

公園で鬼ごっこなどをして騒いでいると、注意をされることが多い。ゲームをしていると大人は何も言わない。子どもの中にも「怒られるからやらない」という考えはある。騒いでいても文句を言われぬ場所は校庭なので、校庭開放の時間はとても貴重。校庭開放の時間が今は短いので、もう少し伸びると良いと思う。地域にはボールを使っている公園がまったくないので、校庭でしかボール遊びができないのが現状だ。

○高野委員：

「9 相談相手の有無、相談できる相手」で、「学校の先生」が上位に上がっているのでホッとしている。思った以上に数値が低いと感じたのは、「スクールカウンセラー（相談員）」。学校の中に相談員（相談できる人）がいる、ということが子どもたちには認知されていないということかもしれない。相談員は常時いるわけではないので、悩んでいる時にいないこともあり、結局は言えなくなる、ということだろうか。成長すると親にも先生にも言えないことが出てくるので、このあたりを更に推進して、現在数パーセントの数値が20パーセントくらいまでになると良い。

「インターネット（掲示板や交流サイトなど）」で相談する子どもが4パーセント前後いることも気になる。クラスに1人、2人はいるということなので、使い方も含めて、情報教育をきちんとしていかなければならない。

○佐々木委員：

インターネットは、特定の人ではない、というのがいいところでもある。

○藤田委員：

スクールカウンセラーについては、保護者が予約してすぐにいっぱいになってしまう。子どもが気軽に聞きに行くような状態ではない。

○鈴木委員：

いつでも学校にいて、誰でも聞きに行けるような感じではない。ちゃんと予約をとって、決まった時間に行くところなので、子どもが今話をしたいと思っても行けない。子どもたちにとっての駆け込み寺は保健室の先生だ。

○高野委員：

保健室にはいつも子どもたちがいる。回答の「学校の先生」というのは、担任ではなく、保健の先生かもしれない。

○羽豆座長：

国もスクールカウンセラーを重視しているようだが、実態は子どもが直接関われない。今後の重要な検討課題だ。単に学校にスクールカウンセラーを配置すればいいというわけではない。中学生では特にスクールカウンセラーへの相談が少ないようだが、実態はどうだろうか。

○西嶋委員：

休み時間には意図的に予約を入れず、空けておく工夫をするスクールカウンセラーもいる。授業を抜けて相談するというのは、子どもも抵抗がある。相談したいとなれば放課後か休み時間だが、その時間は保護者の予約で埋まってしまっている。子どもの実態としては、思い立ったから行ってみようとしても、既に保護者の予約で埋まっているので、活用できない状況になっていると思う。プライバシー保護の観点から、ガラス張りになっているような相談室はないので、子どもの方から足を踏み入れるのには敷居が高い。

○渡辺委員：

スクールカウンセラーについては、「相談できる」というのは機能のひとつにすぎない。色々な状況を抱えている子どもの問題を掴んで意図的に相談につなげていく必要がある。保護者の相談を他の機関につないでいくなど、待っていて相談を受けるだけというのはごく一部だ。この数字はスクールカウンセラーの必要性の一部分を表していると考え、今後は総合的な展開、活用が必要だと思う。

○羽豆座長：

相談相手として、父親の割合が低いのも気になる。今は教育などの面でも父親の出番だと盛んに言われているが、子どもから見ると簡単ではないということかもしれない。

○須永副座長：

父親の役割について、調査からは出てこないところがある。例えば、子どもが父親や母親をどう見ているのか、親に何をしてほしいと思っているのか、といった設問があれば、子どものより詳細な部分が見えてきたかもしれない。この結果だと、相談しやすいかどうかに限られている。昔から、父親には相談しにくいものだ。

最近の子どもを見ていると、父親に叱られていないのではという気がする。これだけは絶対にいけない、という叱られ方をしているのだろうか。家庭裁判所で子どもと親の面接をずっとやってきたが、昭和の子どもはうそをつかなかったが、平成になって子ど

もがうそをつくようになり、うそをつくことに対する罪悪感もどんどん薄くなってきている。それと同時に、人と関われなくなっていると感じている。最初は大人に対する不信感かと思っていたが、子ども同士でも上辺だけの部分でしか付き合えていない。基本的には同調、相手に合わせることで全てになっているようだ。自分の主体性や自己主張を前面に出すと人間関係が崩れてしまう。それを極度に恐れているから、当たり障りのない会話で成り立っている。

また、大人に何かしてもらって、子どもがそれに感謝するというのもかなり減ってきていると感じている。たくさん可愛がられることとしっかり叱られることが大事だと思う。最近の子どもたちはそのようなところがなく、他人に対して自分の本心を明かせなくなっている。全体の流れがどうなっているのか、ということで子どもが自分のポジションや行動を決めるような状態に陥っていて、子ども全体を見たときに、非常に不安だ。いじめについても内心はよくないと思っても、実際にそのような場面になると行動できないだろう。平成の子どもたちは、本当の意味で充足されていないと思う。そこをどうやって埋めていくのかが大きな課題になってくる。

○羽豆座長：

叱られる、褒められるということは重要な経験だ。保護者の立場から見てどうだろうか。

○佐々木委員：

他に一緒に指導してくれる人がいないので、自信のない親が多いのではないか。今の親世代は、何世代もいる中で育ってきた人達では既になくなってきている。自分のやり方であるのか、自信を持って子どもと接している親はなかなかいない。ただ、自分の子どもにとっては、良い・悪いを教えられる親は自分だけなので、そのあたりの認識はきちんとする必要がある。ダメなことをダメだと教えるのは、やはり親でなければいけない。他の人が叱ったのでは、子どもは「この人は怖い人だ」というくらいの認識しか持てない子が多い。怒る、怒られるという関係が以前とは変わってきているのは感じる。

○藤田委員：

同調という意見があったが、親が仕向けている面もあるかもしれない。周りの空気を読んで、うまくつきあっていくように親がしているところがあると思う。

○須永副座長：

家で親に叱られていない子どもが学校で先生に叱られたら、おそらく子どもはパニックになる。代わりに学校で叱られればいい、というわけにはいかない。叱られていないと、罪悪感もできていないのでこじれてしまう。親に叱られていないということは、先生などの次に叱る立場の人達にも必ず影響してくる。しつけの原点としてしっかりしておかないと大変なことになる。

○渡辺委員：

今の中学生が親になる時にはうまく変わっていけるように、という指導が必要だろう。社会教育などで大人がどう変わっていくか、将来中学生が親になった時にどう人と

関わられるか。親になることを想定してきちんと伝え合うことが大事だ。学校では、同調するだけでなく、皆で作りに上げて感動を味わうということも行われていると思う。将来うまく反映されるような見通しを持つことが重要だろう。

○羽豆座長：

ただ叱るだけでなく、何をした時にどう叱るのか、という吟味が必要だ。

青少年・一般市民調査

○羽豆座長：

「10 学習や活動の内容」から「12 西東京市の学習環境」までの結果について、何か意見や感想はあるだろうか。

○渡辺委員：

「10 学習や活動の内容」の青少年の結果で、「職業上必要な知識・技能」が6割となっている。こういった内容をどこかで学びたいということか。学校ではキャリア教育に取り組んできているが、現在の社会は就職率が厳しく、20代の正規雇用率が非常に低いという、今までの日本にはない状況になっている。具体的に職業につながる準備が必要だ。学校の中では高校の進路指導等があるとは思いますが、社会教育等で学べる場を用意しないと、職に就くことが難しくなっていると感じた。

特別支援教育に関わっているが、今は障害の有無に関わらず、社会参加や仕事に就くのが難しい。社会教育がどう役割を果たしていくかが大きな問題だと思う。就職の厳しい青年層の要求がこの結果に表れている。どこまで教育計画に盛り込めるかはわからないが、問題意識としては持つておく必要がある。

○羽豆座長：

「13 公民館の利用状況」、「14 図書館の利用状況」についてはどうか。

○西嶋委員：

若い世代では図書館の利用が多い。反面、公民館についてはほとんど利用していない、知らないという結果で、この差は何だろうと考えた。公民館は図書館と隣接していたり、駅前の足を運びやすいところにあたりする。公民館だよりを手にとったこともない人が7割もいるということなので、そのあたりがネックだと思う。公民館の中に入ってみると、高校生が自習で使っていたり、待ち合わせにロビーを使っていたりするが、多くの方はロビーのこともわかっていないし、サークルでないと入れないイメージもあるのかもしれない。公民館だより以外の方法でも活用の仕方を知らせていかないと、せっかくの施設がもったいない。

○須永副座長：

もう少し公民館が身近になってくれるといい。公民館と図書館は社会教育の中核を担う最も大事な施設だが、現実的に、国民一人ひとりが学ぶことに対して本気になっているのだろうか。防災にしても、災害に直面すれば皆で協力したり、色々なネットワークが立ち上げられたりしていくが、その前に防災教育をやろうとしても動きが鈍い。それと同じで、切実感がないように感じる。

子どもは社会を映す鏡だと思う。昭和と平成の大きな違いは、終身雇用制が崩れたこと。いちいち成果ということを言われるようになってきて、大人もリラックスして子育てできない状況に追い込まれているのではないか。人が何かを学んだり、一緒に何かをしたりする雰囲気が乏しくなっている。公民館を後押しして、社会教育を活性化したい。

○鈴木委員：

30代以降は認知率が上がっている。女性は子育てに行き詰まっているときに公民館の講座で友だちを作ったり、サークルに参加したりするという経験をしているのかもしれない。青少年には、自分が知りたいことや学びたいことを公民館でやっていたり、自分たちで企画もできたりするということを知らせていく場があれば、もう少し活用してくれるのではないか。今はボランティアに関心を持っている若い世代が増えているので、つながり方をコーディネートするような仕組みを公民館が持てばできるようになっていくと思う。西東京市はたくさん公民館があって利用もされているが、高齢者が多い。子どもたちが使える施設になれば、子どもにとっても良い機会だ。

図書館も、この規模の市としては非常に高い利用率だと思うが、勉強や仕事をするためのスペースが少ないという意見が多い。使えばこそ見えてくる不便さだと思う。しかし、施設の広さや使い方の問題なので、できることとできないことがある。

○須永副座長：

市内の図書館はどこにいても混んでいて、座る場所がない。できればもっと拡大してもらいたい。

○羽豆座長：

では最後に、「15 地域・社会活動への参加意向」から「18 いじめや不登校防止のために必要な対策」について、意見や感想を伺いたい。

○西嶋委員：

「15 地域・社会活動への参加意向」で、「学校行事やイベントに関わっていきたい」という意見が青少年で4割という結果に驚いた。学校では、放課後の学習ボランティア等を募っても実際にはなかなか手が上がらない。部活動も指導者不足に困っているところがある。この数値をどうやって取り込んでいけるのか、学校と教育委員会とで連携していきたい。

○高野委員：

「16 学校教育で教えることで重要なこと」で、「表現力やコミュニケーション力」や「社会生活に必要な常識やマナー」の項目は、一般市民より青少年の方が高い割合だ。この項目が高いということは、やはり自分たちでも危惧していて、必要だと感じているのだろう。本来であればこのようなことは親がやることだが、学校の先生にもう少し頑張してほしいというものがきと共に、学校教育に対する願いだと思う。やっていかなければならないと感じている。

「17 小中学校の先生として望ましい先生」については、本当にそうだろうかと思いつながりながら見た。例えば、学校に授業をしっかりとわかりやすく教える先生がいたとして、

それでよしということになるだろうか。人間的に、子どもをありのまま認めてくれる人がいいと保護者は評価すると思う。授業だけでなく、他のことも大事になってくる。数値の読み取り方が難しい。

4 ヒアリング調査について（中間報告）

事務局より資料5説明

インテージリサーチより資料6説明

5 その他

次回の懇談会日程

第5回 平成25年2月21日（木曜日）午後2時～4時 防災センター6階講座室

以上